

インドの夕日、そして闇の中へ

坂本 那香子

思いがけず早く帰れることになったある日、職場横の美術館に私はふと立ち寄りしました。春は確かに近づいているけれど、まだ肌寒い午後でした。美術館では、ちょうど新人絵画展をやっていました。その中の絵のひとつに、私は釘付けになりました。公共の場だというのに、涙が溢れて、止めようがありませんでした。私は近くにあったソファに座りこんで、暫くその絵を眺めました。具体的なものは何も描かれていない赤のグラデーション。鉛丹色から、下に行くにつれて緋色、紅緋と徐々に赤が鮮やかになっていく絵に、「遙」という題名が掲げられていました。

それは、私がシンガポールから日本に帰国して一ヶ月が過ぎようとする頃の出来事でした。

二〇一〇年から三年間、私は夫を日本に残し一歳半に満たない息子を連れて、シンガポールに赴任しました。海外赴任は私の長年の夢でした。それでも、まだ文字通り乳飲み子だった息子を連れて海外に行き、そこで働こうと決断するのは、決して簡単ではありませんでした。私は、自分の夢のために、夫から子どもを奪い、子どもから父親を奪うのかと悩みました。長年の夢が叶おうとしているのに、ここでチャレンジしなかったら、お墓に入る時、きつと後悔する。そう思って、私は最終的にシンガポール行きを決めました。

シンガポールでの生活は、順調に立ち上がりました。向こうでは、子育て家庭の多くは、住み込みのメイドさんを雇います。幸い良い人が見つかり、彼女が家事、育児の全般を切り盛りしてくれました。子どもはすっかり彼女に懐きました。仕事から帰ってくると、部屋がきれいに整えられ夕食が準備されているという生活は、想像以上に快適でした。

仕事も充実していました。シンガポールを拠点にしてアジア・パシフィックの十四ヶ国を担当する業務は、日本国内だけを見ていた時と比べて、格段にエキサイティングでした。一ヶ国の中には、オーストラリアのような先進国から、インド

のような発展途上国までが含まれます。中国における事業の順調な拡大が、アジア・パシフィックの拠点全体に楽観的なムードをもたらしていました。シンガポール・オフィスのグローバルな人員構成も、私をわくわくさせました。私にはシンガポールで五人の部下がいました。その五人全員、いえ、私を含めれば六人全員の国籍が違うメンバーでした。二百人近くが在籍するオフィスの中で、日本人は私だけでした。シンガポールの環境に私はすぐに馴染みました。奇妙なことに、私は日本のオフィスでのほうが、自分を外国人のように感じていました。新卒で経営コンサルティングの会社に入社し、その後事業会社に転職した私は、日本支社の中ではいつまで経っても異分子だったのです。ところが、シンガポールでは人種や背景の多様性はむしろ当然のことで、私が女性であることや、新卒で入社した生え抜きの社員ではないことは、まったく問題ではありませんでした。それは、私にとって、新鮮な感覚でした。

夫とは、海外別居生活は最大で∞年にしようとした私と私の赴任当初から約束していました。そして、楽しくてたまらないシンガポールでの三年間は、あっという間に過ぎました。私は、キャリアの後退を自覚しつつ、日本に帰ってきました。仕事より家族を大事にすべきだと思ったからです。

日本で久しぶりに家族三人が一緒に暮し、週末は高尾山や江の島水族館に出かけました。家族で過ごす時間が楽しい一方、仕事は残念ながら、あまり心躍るものはありませんでした。私を苦しめたのは、現状の仕事が楽しくないことだけではありませんでした。私の夢は、小学校高学年の頃から海外赴任でした。その夢を叶えて日本に帰ってきたのはいいものの、一体全体、次は何を目指せばいいのか、まったく想像もつきませんでした。夢を掲げそれを達成することを最大の喜びとして生きてきた私は、次の夢が見つからないことに何よりも苦しんでいました。

冒頭の「遙」という絵を見たのは、帰国後、新しい環境にやっと慣れてきた頃でした。赤一色のグラデーションを見ながら、私が思い出していたのは、日本に帰国する直前に休暇で訪れた南インドの夕日でした。水草があちこちに浮かび、渡り鳥が羽を休めている大きな湖に沈んでいく夕日を、私はその時四歳だった息子と一緒に見ていました。本当は、滞在していたリゾートホテルの敷地内で提供されているヨガクラスに参加するつもりだったのに、子連れでは駄目だと断られてしまったのです。そこで、所在なく敷地内を散歩していて、夕日がきれいなことに気が付きまし

た。息子と二人、夕日を眺めるためのベストポジションを見つけて座りました。そのまま、三十分以上、初めはゆっくりと、そしてある一点を超えると急速に、夕日が沈んでいくのを見ていました。

その時の息子との会話も覚えています。

「ママ、太陽が赤いね」「夕日っていうんだよ。ちいちゃん（息子の呼称）にバイバイって言ってるんだよ」「どうしてバイバイって言ってるの?」「ちいちゃんの事が大好きだからね。でも今日はもう行かなくちゃいけないから、だからバイバイって」

「ママ、まだ赤いね」「うん、みんなにバイバイって言わなきゃいけないからね。ちいちゃんだけじゃなくて、ママにもあそこの鳥にもこのベンチにも。太陽はみんなのことが大好きだからね」「フィオナ（息子の友人）のことも好き?」「フィオナのことも好きだよ」「フィオナのママは?」「フィオナのママのことも好き」

息子が繰り返す「○○のことは?」という質問に、「○○のことも大好きだよ」と返事をして過ごした時間でした。彼の友人の名前が一巡した後には、その辺にある草や花を指差し、あいだにヘビやウサギなどの動物が入り…。旅行に同行していた他のメンバーは、みんなヨガクラスに参加していたので、結局、夕日が沈みきって真っ暗になるまで息子と二人で過ごしました。本当にあれば、不思議に宙に浮いたような時間でした。

「遙」という題の赤い絵を見ながら、南インドでの夕日を思い出し、私が涙をこぼした理由は明確に思い当たります。その絵を見るまで自覚していなかったのですが、あの夕日は、私が人生の中で過ごしたひとつの時代への別れの瞬間だったのです。私がシンガポールで過ごした時間、その中にはもちろん明暗があり楽しいことだけではありませんでしたが、それでも全体として、私にも周囲にも前へ進むうとする力がみなぎっていました。何かを悩む暇もないぐらいに、すべてにおいて必死ではなかった。その中で、多少なりとも達成したと思えることもあれば、もう少し何かできたのではないかと思うこともありました。しかし、何はとにかく、私の日本への帰国と同時に、私にとってのその時代は終わったのです。南インドは、日本帰国を目前にして、シンガポールから比較的行きやすく、日本からは行きにくい場所として選ばれた旅行先でした。

その絵画展の中で、もう一つ、気になる絵がありました。それは、雲が重い沈痛な

空の下、兩岸から、あるいは真ん中の水上にも、いくつものつながっていない橋が描かれている絵でした。普段なら一顧だにしないような暗い色調の作品でした。どうしてこの絵にここまで心惹かれるのだろう、と考える中で思い当たったのは、私自身の心象風景が、今、これだけ暗いのだという事でした。薄暗く、どこに太陽があるのか、分からないのです。

私はその二つの絵を何度も見比べながら、考えました。たとえば、今、灰色のどんよりとした空の下、太陽も見えず、兩岸から伸ばそうとする橋が届かないような状態でも、私はもうあの夕日のなかへは戻れないのです。どんなに美しい夕日もいつかは沈むのであり、その一日はそれで終わります。あとは、夜の闇の中を手さぐりで歩きながら、いつかまた朝日が昇るのを待つしかありません。闇のなかへ。ほかに選択肢はない。そんな言葉が、自然に私のなかに浮かび上がってきました。

どんなに過去が輝いていて、現在が真っ暗闇だとしても、そしてどんなに強く過去に戻りたいと願ったとしても、私たちは過去に戻ることは出来ません。私たちはいつだって前に進むしか選択肢がないのです。

あの絵を見てから、既に一年以上経ちます。私の次の夢は、まだ見つかっていません。今、私は三十代後半です。この先、人生はまだ続きます。ここが私の正念場です。安易な答えに飛びつかず、十分な時間を掛けて悩むことを自分に課しています。世間の声に惑わされず、自分にとって何が大事かを見極めたいと思っています。視野を広くもち、先入観にとらわれず、全体を見渡しながらも自分の気持ちを見失わずにいたいのです。人生のすべてを計画できるとは思っていません。それでも、ここから先、私がどんな人生を過ごすのかは、今、私が答えを出そうと苦しんでいる問いに依存しています。静かに、そして出来るだけ軽やかに、心の中で何度も繰り返し返します。ここが私の正念場です。

坂本 那香子
(さかもと なかこ)

石川県七尾市出身。
一九九八年米国ミネソタ州マカレストー大学卒。
二〇〇一年 一橋大学経済学研究所修士課程修了。
同年、アーサー・ロ・リトル(株)入社。 三年間経営コンサルティン
グ業務に携わったのち、
二〇〇四年ロシユ・ダイアグノスティックス(株)に転職。 経営企画
グループに入社、二年後同社で最年少の管理職となる。
二〇〇八年男児を出産。
二〇一〇年シンガポールに赴任。
二〇一三年に帰国し、現在は病院の経営企画に勤務。